ＮＰＯ
中帰連平和記念館
CHUKIREN HEIWAKINENKAN

２０１４年度総会報告

5 月 25 日（日）記念館で総会が開かれました。
松村高夫理事長、姫田光義館長の挨拶の後、議長に橋本聡氏、記録に石田隆至氏を選出し議事に入りました。

１．報告事項

①「中帰連に学ぶ会」報告
石田理事（中帰連に学ぶ会事務局長）から「学ぶ会」の経過が報告され、年 3 回の理事会後の「学習・勉強会」が定期的に開かれ、松村理事長からも「定着してきた」と評価の感想がありました。

②「事務局」報告
・年 3 回の『会報』発行を何とか維持し、その都度会費、カンパが届き感謝します。
・今春「メルアド、ＨＰ、ＭＬ」を開設しました。ＭＬ参加希望者はご連絡を下さい。
・『ZOOM　JAPN』と香港フェニックスＴＶ、中国中央ＴＶの取材がありました。（後述）
・「振込用紙」を手数料受取人払いの「赤」の振込用紙に変更しました。
・「記念館パンフ」を今年度中に作成予定。
・新井利男さんの中帰連関連の「写真パネル」が「平和のための戦争展」から寄贈された。
・『戦争遺跡保存ネットワーク』に参加・加入、8 月のシンポで発言予定。
・昨年 12 月の「中帰連に学ぶ会」で岐阜の今井雅巳さん（理事）の「展示」について具体的な構想の発表を受け、実現の方向で努力していきたい。（松村）

２．審議事項

①「決算、監査報告、予算」について。
会計の長坂さんより決算報告（別紙）と、監査の岩淵さんからの「監査報告」、及び 14 年度予算が全員一致で承認されました。

②２０１４年度人事について。
総会委任の理事を含め 13 名、監事 2 名の 15 人全員の再任が了解・承認されました。松村理事長から兒嶋俊郎さん（長岡大学教授）の理事推薦提案が全会一致承認されました。兒嶋さんは「満州国」や「満鉄」の研究をされ、記念館の「藤井資料研究会」でもお世話になっています。

目　　次

・「総会報告」・・・・・・・・・・・・・ 1
・講演「戦争はどう記憶されるのか」を聞いて（遠藤美幸）・・ 2
・第 7 回「中帰連に学ぶ会]・・・・・・・2
・「むのたけじさん」来館・・・・・・ 3
・「人のあかし」を観て　岩淵とも子・・・・・ 4
・「最近思うこと」シモーネ久子・・・・5
・「記念館近況」・・・・・・・・・・・・ 7
・「記念館日誌」・・・・・・・・・・・・ 8
・予告、お知らせ・・・・・・・・・・・ 8

③「平和のための博物館・国際会議」について」

世界各地で 3 年に 1 回開かれており、今年は韓国・ノグンリで 9 月 19 ～ 22 日に開催され、松村理事長と芹沢事務局長の参加が承認されました。発言・発表希望者が多く発表は選考で半分になりましたが、幸いに記念館は全会一致で発言の選考に恵まれました。

尚、国内組織としても「平和のための博物館全国ネット」にも参加しており、毎年、関西と関東の交互に開催され、今年は 10 月に明治大学生田校舎で開かれ参加予定です。

④「朝日新聞」への声明文について。

4 月 28 日付朝日新聞記事『中国、旧日本軍史料洗い直し』の記事に対し、資料の発掘や提示を批判することは妥当ではないと『声明文』（別紙）を朝日新聞社に送ることが決議され送付しました。

「戦争はどう記憶されるのか」

伊香俊哉氏の講演を聞いて

遠藤美幸

5 月 25 日（日）、都留文科大学教授の伊香俊哉さんが、「戦争はどう記憶されるか」というテーマで講演され、昼下がりの中帰連平和記念館にたくさんの人たちが集まりました。伊香さんは、1990 年代から現地の文書史料の発掘とともに中国住民へのヒヤリングを実施し、彼らの戦争の記憶が現代にどのように継承されてきたかを実証的に調査してきました。そして、今年 2 月、これまでの研究成果の結実として、今回の題目と同じ題名の著書、『戦争はどう記憶されるかー日中両国の共鳴と相剋』（柏書房）を出版されました。2012 年の北京滞在時に、伊香さんは日常的に抗日戦争のドラマが上映され、抗日博物館や記念館を熱心に見学する人々を目の当たりにして、中国では抗日戦争の記憶が人々の生活の身近に存在していると感じたそうです。これは戦争を忘却しつつある、あるいは侵略戦争を美化して記憶しようとする日本社会との大きな違いです。この違いは両国の歴史認識の相違から生じることは言うまでもありませんが、これまでの日中の戦争の記憶の仕方が現在の両国の関係性の形成に大きな影響を及ぼしています。

今回の伊香さんの話の中で、私がとくに印象に残ったのは、著書のサブタイトルにもあるように、日中の戦争の記憶の「共鳴」と「相剋」についてです。「共鳴」の典型的な事例は、加害者の視点で**山西省? 「三光」**の凄惨な実態を具体的に語った元戦犯の日本兵の証言が、現地の被害住民の記憶と一致したこと、まさに「撫順の奇蹟」が日中の記憶の「共鳴」を導きました。これに対して、雲南の拉孟（らもう）戦の事例は、全滅戦を生き延びた日本兵らの加害を見ない「勇戦敢闘」の記憶と侵略の被害を忘れない現地住民の記憶の不一致から生ずる「相克」が、現在の現地の根強い反日感情に反映されていることです。拉孟戦の関係者は、1998 年に将来の慰霊や遺骨収集の実現を願って反日感情の強い龍陵に小学校を寄付しましたが、2012 年にその小学校は民間会社に売却されていることがわかりました。日本側が和解の証と思い込んでいた小学校の行く末は十数年のはかないものでした。伊香さんは著書の中で、拉孟戦の生存者や遺族らの戦争の記憶の仕方が、彼らの希望であった現地での慰霊や遺骨収集の実現を阻む一因になっていると書いています。

今回の伊香さんの話を聞いて、改めて「中帰連」の戦後の活動とその志を受け継ぐ人たちの粘り強い活動が、被害者の憎しみと向かい合い、お互いの記憶の「共鳴」を導き、日中の関係性を形成する希望となっていることを再認識しました。

（柏書房・刊）

第7回　「中帰連に学ぶ会」報告

石田隆至（「学ぶ会」事務局長）

4 月 20 日午後、「いま、東アジアへの＜まなざし＞を再考する：中帰連の経験をいかに活かすか」というテーマで、事務局の石田が報告を行いました。これは、高齢化のため中帰連の当事者による証言がほぼ不可能になってきたことに加え、政治・社会情勢がますます東アジアに敵対的になり、集団的自衛権を行使可能にしようとするなど、中帰連の人々が望んだ方向と逆行しつつある現実を前に、後続の世代としてどう活動していくかを考えるためのきっかけとなればと考えた報告でした。

まず、中帰連が 90 年代に言論戦を展開した「歴史修正主義」（戦前の天皇中心史観への回帰を目指す言論）がますますあけすけに行動、発言していることを確認しました。新大久保などで韓国・朝鮮人への差別的発言を繰り返すヘイトデモの現状、都知事選での田母神俊雄候補の浸透度、NHK の百田尚樹委員の南京虐殺否定発言に特徴的な没論理性、安倍晋三首相の南京虐殺否定アピール…。ここでは、特に、サッカーの浦和レッズ・サポーターが「ジャパニーズ・オンリー（日本人以外は出て行け！）」という横断幕を掲げたことを取り上げました。報道では、こうした一部の不埒な者の行為を取り締まれば秩序は回復するというスタンスで解説していましたが、電車の中吊り広告は毎日のように中国人や韓国・朝鮮人への差別的言辞であふれ、朝鮮学校への補助を停止する措置にも多くの人々はそれが差別だと感じていないのが現実です。他方、高級百貨店やレストランで食品偽装が発覚しても「誤表示」と言い抜けて、普段あげつらっている中国製品の「偽装」と結びつけることもなく、反省する姿勢は見られません。こうした日常的な「ジャパニーズ・オンリー」の雰囲気が、差別的な事件や報道を可能にしているといえるでしょう。

最後に、3 月に行われた丸山真男（政治学者）の生誕 100 年講演会の報道を取り上げました。軍隊を経験した丸山は敗戦後すぐに、軍国主義を生み出した日本人の精神構造を批判的に分析したことで知られています。その丸山の晩年の肉声テープがメディアで紹介されました。戦前の日本社会について触れた丸山はこう語っています。「日本の外に出れば全然通じない理屈が日本の中だけで堂々と通用して、それ以外の議論は全然耳にもしない。それを問題にする人があったら非国民と言われたりさんざんなものだった」。この内容は現在の日本社会の雰囲気にもそのまま当てはまります。アジアへの「まなざし」が独りよがりで一方的な点で、戦前と戦後はまったく連続しているといえます。

こうした連続性は中帰連の帰国後の歩みからも見えてきます。実際に戦争で自分が手を染めた行為の責任を引き受けて語り伝えようとしただけで、社会から猛烈な批判を浴び、就職や地域社会で差別を経験したため、80 年代に入るまで思うように活動できませんでした。戦後も多くの日本人が戦前の価値観のままだったからです。

戦争というものを少し幅広く捉えるなら、＜人間の尊厳性（人権）を否定し、秩序のために道具化し、国際社会で勝利する＞と言い換えることができます。そう考えれば、戦前も戦後も、そして＜今＞も戦争は続いていると言えるかもしれません。丸山が語ったように、中帰連の事業と精神を引き継いでいくとき、非国民のように扱われる風潮は今後ますます強くなるでしょう。事実、記念館スタッフの中にも言論の場で非難や制限を受けている人たちがいます。社会全体の差別的な「空気」に飲まれず、それをいっそう「可視化」する取り組みが、中帰連の未完の事業を推進することではないでしょうか。

「むのたけじさん」来館

記念館では 5 年ほど前にむのたけじさんに「講演」をお願いしましたが、当時体調を崩されキャンセルになったことがありました。

その後、高齢にご無理もお願いできないとそのままになっていました。処が 6 月上旬にご子息の大策さんから「父が友人と訪ねたい

との要望をお願いできますか」とメールが入り 6 月 11 日に来館下さいました。

急でしたので「講演会」ではなく、理事と普段ボランティアに参加下さっている皆さんとの「懇談会」の場を設定しました。

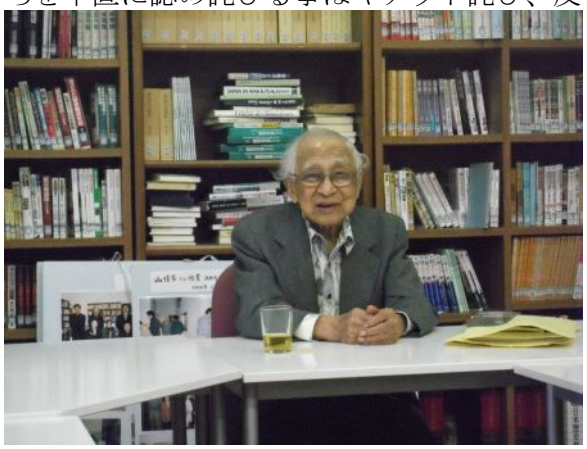
当日は医師でご子息の武野大策さんと、むのさんのご友人で建築家の細川清和さんの 3 人で来館下さいました。細川さんは大手ゼネコン・大林組の部長を定年退職され、いま中国で大型ビルの建設に協力されているとのことです。むのさんは到底 99 歳とは思えない何時ものあの大きな声でお話し下さいました。

むのさんは敗戦の 8 月 15 日の前日夜、責任を取るとたった一人朝日新聞社を辞し、その後、故郷の横手に戻り週刊新聞『たいまつ』を 30 年にわたり発行し、反戦平和や日中友好などにご尽力されてきたことは知られています。

むのさんは 25 歳で戦場の最前線を取材しましたが、当時「本当の事は書けなかったが、ウソは書かなかった」と話しました。また、慰安婦の哀れな女性たちを目前で見ており、「彼女たちは軍用船に乗せられていたが、軍用船は許可無しに誰も乗れなかった」と証言しました。

安倍政権や集団的自衛権を批判し、「この記念館の中の歴史の事実を踏まえ、埼玉の此処が日中問題を話し合う場になればと思う」と評価して下さいました。

日本は戦争責任のケジメをつけておらず、人間は間違いを犯すからダメではなく、「過ちを率直に認め詫びる事はキチット詫び、反



（お元気で話す、むのたけじさん）

（大策さん、細川さん、むのさん、理事長）

省することは反省してこそ人間は前に進める」と話し、その反省の違いをドイツを例に比較しました。

何十年、何百年経とうとも詫びることは詫びその思いが 1 億国民のものと中国に伝わらなくてはダメであり、そうすれば本当に中国と仲良くなれると話しました。

むのさんはあの大きな声で机を叩きながら怒っていました。今後も健康にご留意戴きご活躍とご指導をお願いしたいと思います。

来館下さったむのさん父子と、建築家の細川さんの 3 人とも記念館の「会員」に入会して下さいました。また、むのさんには近著 5 冊をサイン入りでご寄贈戴きました。

『人 の あ か し』を観て

岩淵とも子

ようやく春めいた 4 月中旬、私は「京浜協同劇団」主催の「人のあかし」のお芝居を見る機会に恵まれた。「中国帰還者連絡会」を引き継いだ「撫順の奇跡を受け継ぐ会」の存在を知ったのは、「悪魔の飽食を歌う東京合唱団」に入団して何年目かに川越の平和記念館で悪魔の飽食の中から何曲か歌わせて頂いたときです。ですからまだ数年前の事です。

当日、迫真の演技を目の当たりにして、私の頭の中で日本軍が中国で行なったことについて多少は知っていた事が、現実感となって私の体に突進してきたのです。人間はここまで残酷になるのだという現実と、それを受け入れられない自分がいて嫌悪感、憎悪感でいっぱいになりました。ところが、会の名前に

もありますように撫順の管理所での温かい中国人の対応に戦犯は人のこころを取り戻すことができたのです。私は中国人は残留孤児を大切に育ててくれた、というイメージを持っていま（「人のあかし」のチラシ）すが、おおらかな寛大なこころを持っている民族なのでしょう。管理所から日本に戻った方々がこの事を語りついで下さり、そして創立 55 周年という長い歴史のある京浜協同劇団の方々がお芝居にして下さり、私も現実感をもって知ることが出来ました。ありがとうございました。

私の父は明治 43 年生まれ、生きていれば 104 歳になります。この戦争に行っています。昭和 19 年 5 月に生まれた姉の出生時、父はいなく、長兄が姉の名前を付けたと聞いています。父はラッパを吹いていたと兄から聞いたこと、父からは小さな私たちに「イ～アル～サンスウ～ウ～ル～チ～パ～」と数えることだけでした。89 歳まで生きてくれた父と語る時間は沢山あったのに、戦争の話は一切ありませんでした。今の私でしたら何とか聞き出したのに、当時は私自身が何も知りませんでした。この事だけは悔やまれてなりません。

金子みすずの詩の中に「私は不思議でたまらない、黒い雲から降る雨が銀に光っていることを。青い桑の葉食べている蚕が白くなることが。」とあります。それをちょっとお借りして「私も不思議でたまらない、あれだけの残虐行為受けたのに仏のこころで接することが出来たなんて。月まで行ける知恵持つ人類が殺し合いを続けていることが。識者といわれる人達が処理の出来ない核のゴミ、地球の奥深く埋めようと考えていることが。

「シモーネ久子さんの寄稿について」

過日、記念館がズーム・ジャパンという英文･仏文のジャーナルの取材を受けたとき、シモーネ久子さんが通訳ということで来館されました。実は久子さんは取材にこられたシモーネさんの妻だったことが取材の最後にわかったのですが、その日応対した松村、芹澤、宮本に、久子さんはこんなにすばらしい記念館のことをなぜもっと多くの人に知らせないのか、といわれ、私たちは大いに尻をたたかれました。彼女はすぐ会員になってくださり、先日の伊香先生の講演会にも参加され、積極的に発言されました。そこで久子さんに現在の日本の憂うべき状態について書いていただいたのが次の文章です。（文責ー松村）

「最 近 思 う こ と」

シモーネ久子

数年前まで政治や原発などにも全く興味のなかった私だが、福島第一原発事故で目が覚めた。政府は国民の命を守らない、そして平気で嘘をつく。まざまざと見せつけられ怒りが噴出した。そしていろいろな事が繋がりだした。

侵略戦争の隠ぺい、原発、基地、教科書問題、ＴＰＰ、遺伝子組み換え食品、最近では秘密保護法強制可決、集団的自衛権の行使、武器の輸出、尖閣諸島、竹島問題など、問題は多岐にわたる。根本にあるのは経済優先、一番大切な国民の命や健康より金なのだ。この世の中は人権も経済も平等ではない。誰かの犠牲の上に今の幸せな生活があることに気付かされる。多数の利益の為に少数の人権が犠牲になり、弱者は厳しい現実ではあるが、声を上げ続ける事が必要であり、それによって世の中は変化する。

安倍政権は憲法で禁じられている集団的自衛権を解釈だけで行使しようとしている。アメリカの先兵として自衛隊が戦地へ行く事が可能になり、武力行使、武器の使用、人殺しの加害者、被害者になりうるという

事だ。また、厄介な秘密保護法が強制可決されたが、自衛隊の動きが特定秘密になれば国民の理解なく戦争が始まる可能性も危惧される。安倍政権は集団的自衛権に関して楽観的過ぎはしないか？己の信じた事を疑いもせず、国民を戦争の道へと引きずり込むのか？近隣諸国との関係悪化、テロの脅威にさらされると想像できないのか？

日本は 54 基もの原発を抱える原発大国であり、テロに狙われたら国土の狭い日本は終わりである。他国に軍事で出ていく事より自国の足元を見た方が良いのだ。戦争は正義と言って人を殺す事。自国の価値に合わなければ武力で抑え込む。日中韓での反日感情は、日本教育の根幹である教科書に侵略戦争の真実を載せず、子供たちに教え伝えないからであり、これは大変な罪で危険な事である。

今や中国は世界にとって経済関係を強めたいビジネスパートナーであり、日本が軍事で対抗しても勝てるはずもなく、中国の軍事費をみれば一目瞭然である。

安倍総理の意識は、狂っているとしか言いようがない。憲法と国民を軽んじ、憲法９条、民主主義、立憲主義を無視し、暴走する。憲法は権力者を縛るもの、時の権力者の暴走を防ぐものである。この常識が通用しない所が安倍政権の無知無能なところで、また無知は力なりと悪の道へ突き進む。

政治家は勇敢な論争だけで、全くリアリティーに欠け、戦争で死ぬことのない者に、国民である自衛隊員の戦死と向き合う覚悟はない。安倍政権は国民の平和や幸せよりも国益が大事という、富国強兵の日本を取り戻したいのだ。国権が人権より上になれば国民が弾圧され、内閣の人事に関しても政権の意向を隅々まで反映させ権力集中させる魂胆である。

（取材を受ける松村理事長とシモーネ夫妻）

企業が国を支配し、政権に反映され、金で買われたメディアは情報をコントロールし、無知な国民は国の行いを疑問に思わない。疑問に思う者は言論統制され許されない。世の中は極端に２分化され、１％の富と権力を持つものが支配し、99％の国民は言う事を聞く。そんな奴隷化した世界に日本も向かっているようでならない。

アベノミクスと題されたアホノミクスは大企業を優遇し法人税を減らし、議員歳費は元に戻り、穴埋めとして消費税増、年金の支給額減、介護負担増、国民から血税を搾りとる。復興税は所得税に加算、そしてまた復興名目で個人住民税に加算される。

国民を締め付け防衛費が膨らみ、富国強兵の道へ突き進んでいる。なんとなく聞き心地のよい「集団的自衛権」を「集団的侵略権」と暴露し「日本は軍隊を持ち他国と一緒に戦争をする」と何故国民に説明しないのか。そうすれば皆分かる、安倍晋三は総理の資質がない事を。

国民はこのような政治家の悪行を他人事のように聞いて何も思わない、物言わないのは、未来を担う子供たちを命の危険にさらす事である。自分の夫、息子や孫が戦争に行くかもしれないと想像したら、誰もが気が狂う思いであろう。安倍総理自身、血生臭い戦争に行く覚悟はあるのか？己が独り行けば良い。

国民を戦争に巻き込み、己は安全な所で指令するだけなのか？祖父であるＡ級戦犯岸信介と同類だ。虚栄心の塊のような一族は真の戦争を知らない。痛みを知らない。

戦後、原発を推進したのもＡ級戦犯だったことを知って愕然とした。死刑にならなったのもアメリカに利用される為に生かされたのだ。Ａ級戦犯はアメリカの指示により創設者などの重要職務につき、読売新聞社、日本テレビ、科学技術庁、原発推進など、戦後国民誘導の為に使われたのだ。そ

して今もなおその子孫たちが日本の平和を脅かす。

しかし、暗い事ばかりではない。日本には知的有能な学者が沢山いる。今、デモや講演会など積極的に行われ、反原発、反戦争と国民の意識を高めている。この方たちの知を共有し、安倍政権の魂胆を暴き、日本は戦争の過ちを二度と犯してはならない。

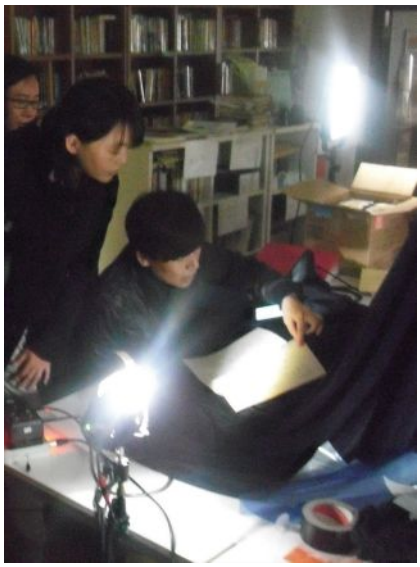
「記念館」近況

①『ＺＯＯＭ　ＪＡＰＡＮ』取材

イギリスとフランスで日本を紹介している現地の月刊誌『ZOOM　JAPN』のシモーネ記者が 4 月 12 日にカメラマンを同行し取材に来ました。シモーネ記者は「靖国」も取材して、畑の真ん中のオンボロの記念館との対比に多少ビックリ！と話していました。しかし、その「資料」の大切さを理解してくれました。

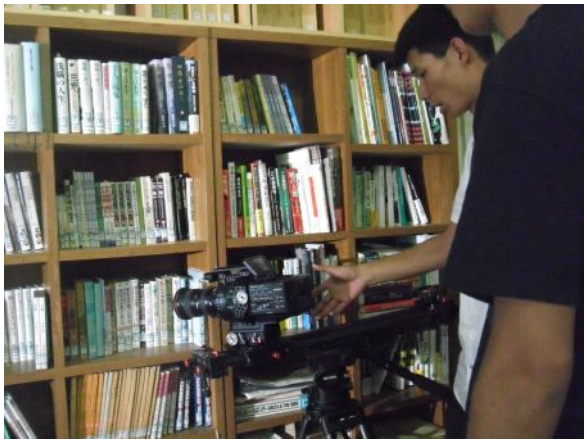
逆にこんな政治や社会なのに「なぜ日本人はもっと怒らないのか？」と檄を飛ばされました。同行した久子夫人が記念館の活動・使命に感動し、早速、記念館の会員にも入会下さいました。(「写真」前頁)

②「香港フェニックスＴＶ」取材



（香港ＴＶの資料撮影）

香港フェニックスＴＶが 6 月 12 日に取材に来館し、元中帰連の稲葉績さん、理事の石田隆至さんのインタビューや記念館の資料・施設などを取材しました。



（ＣＣＴＶの取材撮影）

③中国中央ＴＶ（ＣＣＴＶ）取材

「中帰連」取材のために中国中央ＴＶが来日し、6 月 21，22 日の両日記念館にも取材に来ました。監督、カメラマン、助手、通訳の 4 人に、記念館会員で明治学院大学教員の張宏波さんも通訳として両日ご協力下さいました。

22 日はさいたま市在住の元中帰連・稲葉績さんと、松村高夫理事長が所用のため事務局長の芹沢がインタビューを受けました。記念館の取材は建物の外観から、内部や資料などを撮影しました。稲葉さんは加害体験や管理所体験だけはなく、戦後も軍命で山西省に 2600 名の仲間と共に残留させられ、3 年 8 ヶ月も八路軍と闘った経験があります。

しかし、帰国すると上官の「命令はしていない」との証言が採用され、その戦後の戦いで戦死した 560 人と共に「逃亡兵」扱いで恩給さえ出ませんでした。

芹沢へのインタビューでは、なぜこの様な運動に参加するようになったのか、そのキッカケや今までの人生、平和への思いや価値観、また、中国や中国人への要望や感じることなどの質問がありました。

取材班は 6 月 16 日に北大で公演された『再生の大地』合唱団の取材や、この後、岐阜の元中帰連・西尾克己さんや神奈川の絵鳩毅さんの取材に向かいました。

「戦争遺跡保存全国ネットワーク」参加

８月 17 日に明治大学生田キャンパスで開かれる『第 18 回戦争遺跡保存全国シンポジウム」の分科会で発表予定です。尚、参加各団体の展示も行われます。

日時：2014 年 8 月 16 日～ 18 日
会場：明治大学生田キャンパス

・16 日（土）13 時開会
「記念講演」アジアの平和と日中関係のこれから丹羽宇一郎氏（前中国大使）
18 時全国交流会
・17 日(日) 9:15 ～ 分科会（中央校舎）
フィールドワーク
詳細は「登戸研究保存の会」へ

「ノグンリ国際会議」に参加発言予定

国内の「平和のための博物館ネット」に参加しておりますが、3 年に 1 度その「国際会議」が開かれ今年は 9 月に韓国「ノグンリ」で開催され、松村理事長が参加し発表予定です。

発言希望者が多く半分に選考されましたが、記念館は全員一致で推され発言の機会を得ました。

新井利男さん資料寄贈

長い間「中帰連」を取材された故新井利夫さんの大小 30 点余りの写真パネルが『平和のための戦争展』より記念館に寄贈戴きました。

記 念 館　日 誌

・『会報』９号発送　536 通(2/26)
・「浄化槽」エアポンプ修理（3/19)
・第７回「藤井資料研究会」（3/30)
・中帰連ご遺族近藤洋子さんから中帰連 44 冊寄贈(4/5)
・新井利男さんの「写真パネル」日中友好協会から届く(4/6)
・「東京外語大」留学生支援の会バザーに本 16 箱寄贈(4/7)
・岐阜の今井さん宛て寄贈本発送
・元千葉中帰連・篠塚良雄さん逝去（4/20)
・2014 年度第１回理事会開催、午後「中帰連に学ぶ会」
・香港フェニックスＴＶ取材（5/15）
・第８回「藤井資料分析究会」（5/17）
・2014 年度総会、午後、伊香俊哉さん講演会　（5/25）
・ＮＴＴ電話回線修理「モデム」取替え(6/4)
・むのたけじさん来館(6/11)
・中国中央ＴＶ来館取材(6/21,22)

第８回「中帰連に学ぶ会」予告ご案内

日時：8 月 3 日（日）13:30 ～ 16:30
場所：「中帰連平和記念館」
テーマ：「藤井治男資料分析研究」中間報告
講師：兒嶋俊郎さん（理事・長岡大学教授）

「振込用紙」変更について

日頃の会費・カンパのご支援有り難う御座います。今回から振込料金を記念館で負担することになり振込用紙が「赤」に変更になりましたので宜しくお願い致します。

尚、会費の二重払いなどを防ぐためにも、今回会員の皆様には会費納入状況を封筒に記載させて戴きました。「カンパ」も大歓迎です。

『NPO・中帰連平和記念館』
〒 350-1175 埼玉県川越市笠幡 1948-6
TEL&FAX：０４９－２３６－４７１１
E-mail：npo-kinenkan@nifty.com
ＭＬ：npo-kinenkan@freeml.com
ＨＰ：http://npo-chuukiren.jimdo.com/
郵便振込口座名「NPO・中帰連平和記念館」
振込口座：００１５０－６－３１５９１８
開館日：「水、土、日」(10:30 ～ 16:30)
（なるべく事前にご連絡下さい）